

**令和3年度
全国公立大学学生大会
LINKtopos2021
in Iwate**

「あれから、これから」

報告書

2021年度公立大学学生ネットワーク運営学生

【目次】

0.はじめに	3
1.令和3年度大会プログラム	4
2.参加者の対象と推移	5~7
3.活動内容とその成果	7~25
3.1 大会 1日目	
3.1.1 開会式	
3.1.2 アイスブレイク	
3.1.3 アイスブレイク（満足度）事後アンケート結果/参加者の声	
3.1.4 講演会	
3.1.5 1日目総括	
3.2 大会 2日目	
3.2.1 閉会式	
3.2.2 2日目総括	
3.3 ワークショップ	
3.3.1 テーマ① 配慮ケア	
3.3.1.1 講演会	
3.3.1.2 テーマ別報告会（成果物一覧）	
3.3.2 テーマ② 復興まちおこし	
3.3.2.1 講演会	
3.3.2.2 テーマ別報告会（成果物一覧）	
3.3.3 テーマ③ コロナ禍における地域活動	
3.3.3.1 各団体の活動共有	
3.3.3.2 テーマ別報告会（成果物一覧）	
3.4 ポスターセッション	
3.4.1 ポスターセッション（満足度）事後アンケート結果/参加者の声	
3.5 OB.OG企画	
3.5.1 OB.OGインタビュー動画	
3.5.2 OB.OG講評	
3.5.3 OBOG企画（満足度）事後アンケート結果/参加者の声	
3.6 オープンチャットの活用について	
3.6.1 オープンチャット（満足度）事後アンケート結果/参加者の声	
3.7 SNSの活用について	
3.8 プログラム全体を通して	
3.8.1 プログラム全体の事後アンケート結果/参加者の声	
4.次年度以降の学生大会開催に向けて課題、課題への提言	26
5.全国公立大学学生大会の今後の展望について	27
6.謝辞	28
7.公立大学学生ネットワーク運営学生 名簿	29

0.はじめに

今年度も新型コロナウィルス感染症の影響により、2年連続のオンライン開催となった。企画委員の先生方をはじめ、公立大学協会の皆様、岩手県立大学の協力、参加していただいた皆様のおかげで無事に大会を終えることができた。

今大会テーマ「あれから、これから」には、東日本大震災からの10年を振り返り、「これから」をより具体的に想像し、行動につなげるきっかけにしてほしいという想いをこめた。これまで地震だけでなく豪雨や噴火等の災害、新型コロナウィルス感染症により生活が一変するなど、この10年で大きく変化してきた。LINEなどのSNSが発達し、多くの人が簡単に誰かとつながることができるようになった。特に災害が起きた直後に被災地から声が届くこともあり、「救援物資が足りない」「土砂災害による通行止め」「川の水位上昇」など多くの情報を得やすく、かつ発信しやすくなった。一方で10年が経ち、一つの節目が過ぎることとなる。これから風化を防ぐ、さらには新型コロナウィルス感染症と災害が重なることで起きる課題などもあげられる。それらに対し、公立大学生になにができるのか、今どんな活動をしているのかについて話し合う場にしていくことを目標とした。

今年、LINKtoposのきっかけとなった東日本大震災から10年という節目や新型コロナウィルス感染症を取り上げ「防災、コロナ禍における地域活動」という軸で大会を作り上げてきた。東日本大震災の事例や新型コロナウィルス感染症を通して参加者自身が経験してきた事例をもとに組み立てたワークショップを行った。参加者数は、学生が92名、教職員40名、参加大学数は22校となった。

以下は今回の大会に関してのまとめである。LINKtoposへの理解と来年度以降のLINKtoposの活動に役立てて欲しい。

2021年度公立大学学生ネットワーク 代表
岩手県立大学 社会福祉学部社会福祉学科4年 菊池 真悠子

【全体写真】



1.令和3年度大会プログラム

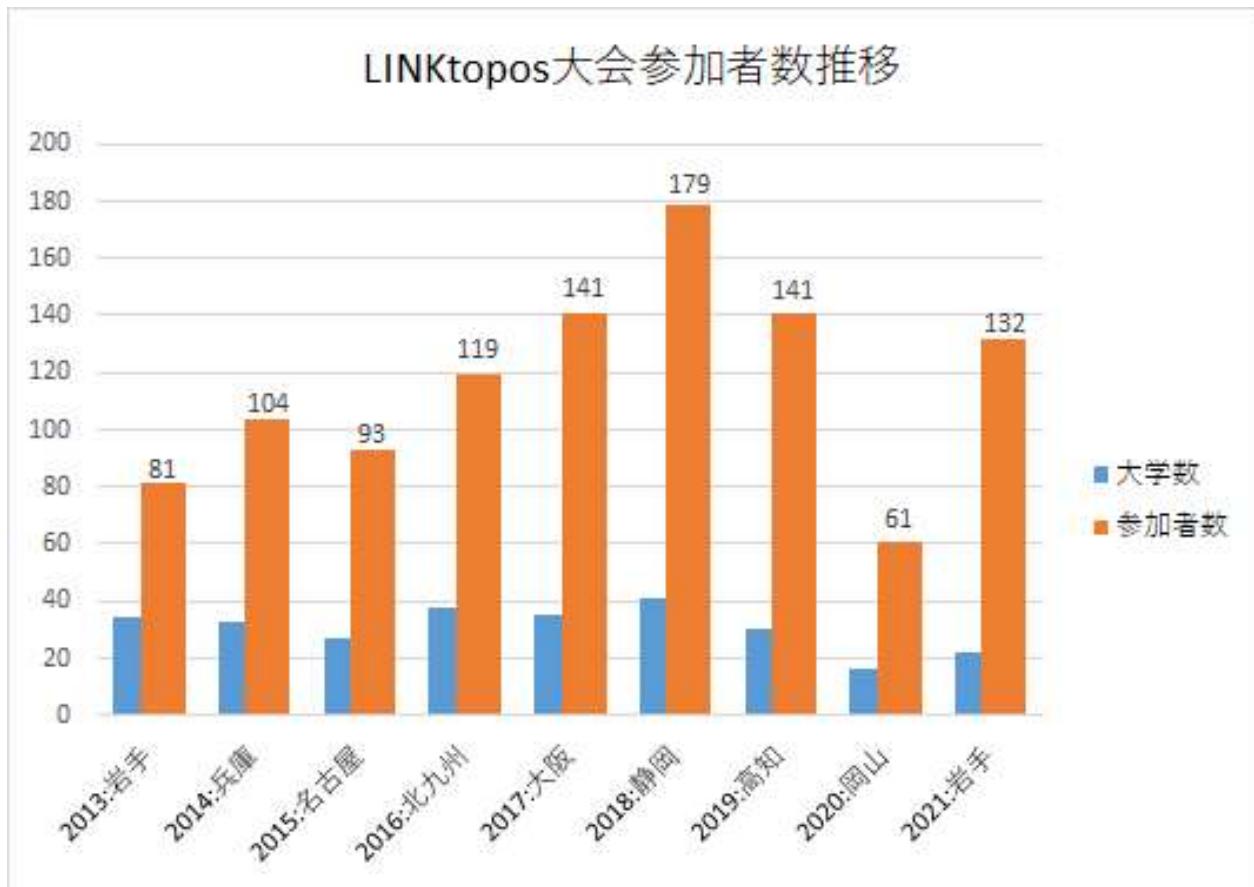
1日目 <9月15日（水）>

時刻	内容
10：00～10：25	開会式
10：25～10：55	アイスブレイク
10：55～12：00	ゲストスピーカー講演
12：00～13：00	昼食
13：00～13：30	質疑応答・感想共有
13：30～17：50	ワークショップ
17：50～18：00	諸連絡

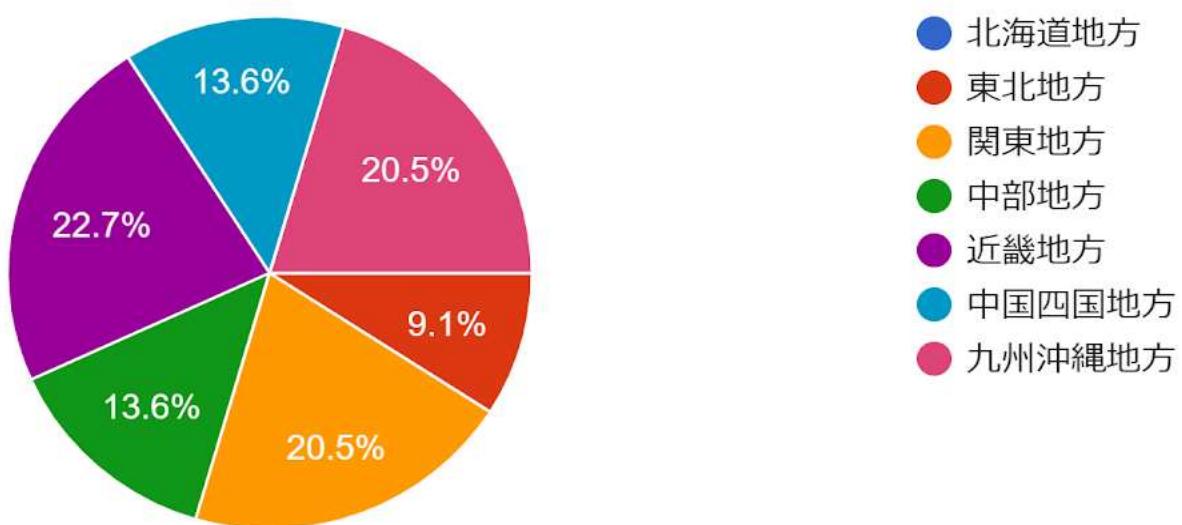
2日目 <9月16日（木）>

時刻	内容
10：00～10：05	諸連絡
10：05～12：00	ワークショップ まとめ・最終発表（テーマごと）
12：00～13：00	昼食
13：00～13：55	ワークショップ 全体発表（各テーマ1グループ選出）
13：55～14：00	休憩
14：00～14：10	OB・OG講評
14：10～14：40	閉会式

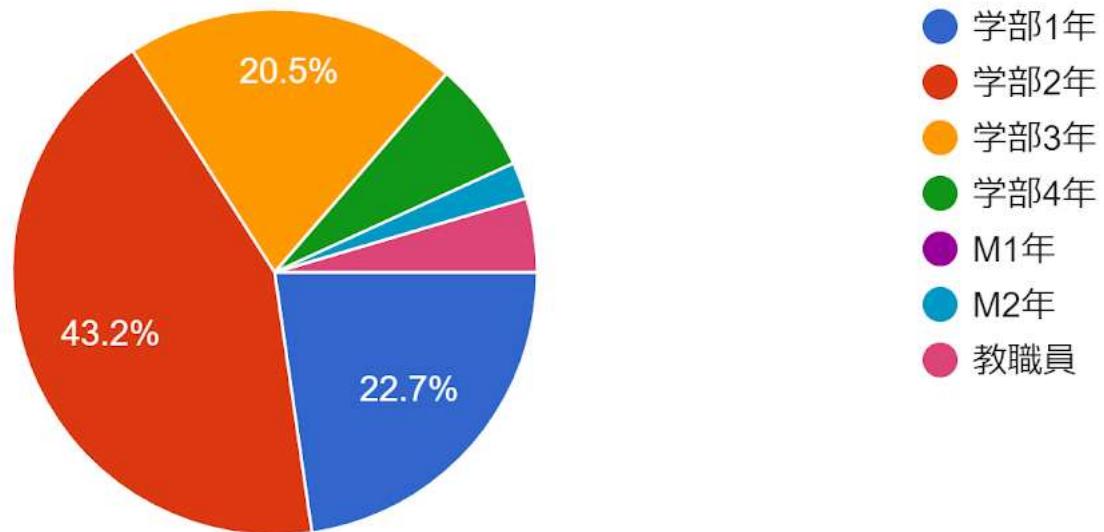
2. 参加者の対象と推移



LINKtopos2021エリア別参加者数（アンケート回収率33%）



LINKtopos2021参加者属性（アンケート回収率33%）



3.活動内容とその成果

3.1 大会1日目

3.1.1 開会式

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

開会式は、主催校である岩手県立大学鈴木学長、企画委員の先生方を代表して高知県立大学の清原先生から参加学生への激励をいただいた。また、OBOG企画にて各世代の代表から、今大会参加学生へのメッセージ動画を公開し、参加者の意欲を高める始まりとなった。

3.1.2 アイスブレイク

【LINKtopos2021運営 岩手県立大学総合政策学部2年 山崎恵理香】

◎概要

参加者の緊張緩和のために、参加者を無作為にグループ分けし、グループ内で「自己紹介」と「JUST ONE」を行った。「JUST ONE」とは、回答者とお題に沿ったヒントを出す人に分かれ、回答者がヒントをもとにお題を当てるゲームである。自己紹介では、名前、所属大学、最近嬉しかったこと、大会への意気込みについて参加者に述べてもらった。

◎成果

アイスブレイクの内容を決める際に、運営学生間で試行したことによって、時間やリスク管理を行うことができた。また、各グループに運営学生を配置することで円滑に運営することができた。参加者からは、楽しかった、緊張がほぐれたという感想が挙がった。また、参加者が場を温めてくれていたことや、先生方もカメラをオンにして参加をしていたということもあり、終始盛り上がっていた。

◎課題

アイスブレイクでは三点課題が挙げられる。

一点目は、自己紹介の時間が短く、全員が自己紹介を行うことができなかつたグループが生じたことだ。このことから、自己紹介をランダムで行うか、自己紹介の移動の時間を考慮して、制限時間をより長くすること、また、自己紹介も運営学生間で試行することが須要だと感じた。

二点目は、参加者にブレイカウトルームを選択して入室してもらう形をとったが、ブレイカウトルームに自分で移動したことがない参加者が多数生じ、移動時間が長くなつたことだ。このことから、事前にブレイカウトルームの移動方法について説明をすることで、移動時の混乱を防ぐことができたと考える。

三点目は、アイスブレイクのチーム分けがWSと無関係ではないかという声が上がったことだ。このことにより、アイスブレイクを行う意図を参加者に説明する必要性が生じた。

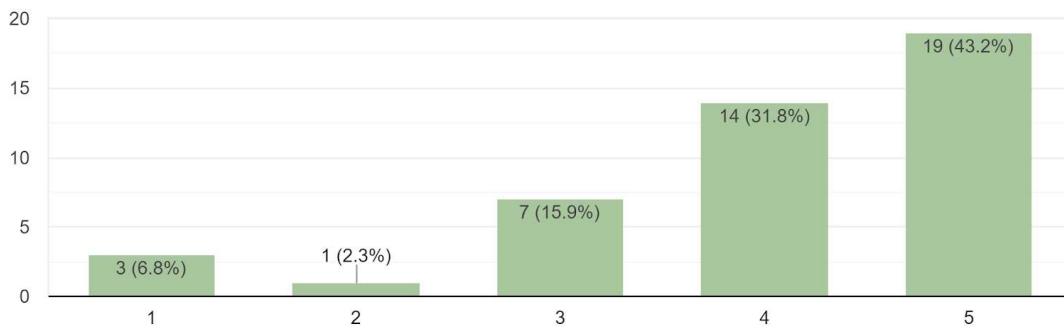
3.1.3 アイスブレイク（満足度）事後アンケート結果/参加者の声

【LINKtopos2021 運営 新見公立大学 健康科学部 2年 徳山光希】

◎全体アイスブレイクの満足度について(事後アンケートより)

<day1> 全体アイスブレイクの満足度について

44 件の回答



◎全体アイスブレイク参加者の声

- ・ブレイクアウトルームへの移動に時間がかかり、全員の自己紹介が時間内に終わらなかった。
- ・簡単で分かりやすいゲーム、絵を描かなくて良いゲームだったので楽しかった。
- ・アイスブレイクのグループとワークショップのグループは同じ方が良かった。
- ・あまりコミュニケーションをとらないゲームだったので少し残念だった。

3.1.4 講演会

【LINKtopos2021 運営 北九州市立大学 国際環境工学部 3年 川相恵吾】

◎概要

株式会社8kurasu 防災教育推進担当 菊池のどか様から約60分間にわたりご講演をいただいた。2011年、菊池様は岩手県釜石市の沿岸地域の中学校に通っており、東日本大震災発生時には小学生とともに避難され、その行動については「釜石の奇跡」として伝えられている。当時の避難の様子や、語り部や被災者としての震災から10年の間に感じた思いについてお話をいただいた。講演後は参加者からの質疑応答の時間を設けた。

◎成果

東日本大震災から10年経ち、直接被災者から当時の出来事を聞く機会が少ない中、この機会に改めて講演を受けて、振り返り、考え方をきっかけになった。メディアではさほど報道されない、当時の避難時の行動や避難後の生活、被災者として、また語り部として感じた思いについて詳しくお話をいただいたことで、参加者には知らなかつた部分があり、勉強になる部分が多くなつた。また、震災発生前から今に至るまでの生活について詳しくお話をいただいたため、より深く理解することができたと思う。また、「語り部」として活動を進めていく中で周囲に対する思いや、菊池様が当時避難した行動が「釜石の奇跡」と報道されていることに対して感じた思いについて語っていただき、当事者にしか感じられないことについて学ぶことができた。この講演を踏まえて、自分が被災者になった場合にはどう行動していくか、自分事として考えるきっかけになれば良いと感じた。

◎課題

今回の講演は、講演後にGoogleフォームで質問を受け付け、希望者には菊池様に直接質問をしていただいたが、参加者には気軽に質問ができるようなオンライン上での雰囲気づ

くりや質問の受け付け方についてもっと考える必要があると感じた。



ゲストスピーカー講演にて、株式会社8kurasu菊池のどか様からお話を伺う様子。

3.1.5 1日目総括

【LINKtopos2021 運営 北九州市立大学地域創生学群 3年 妹尾多恵】

zoom開設後、開会式開始。順に運営委員代表菊池の挨拶、岩手県立大学鈴木学長挨拶、清原先生挨拶。のちアイスブレイク開始。アイスブレイク概要とルール説明後、5人1グループでブレイクアウトルームで自己紹介。ブレイクアウトルーム割り振りに時間がかかった。のち10人1グループでアイスブレイク「JUSTONE」実施。アイスブレイク終了後、講演会開始。いのちをつなぐ未来館 菊池のどか様にお話しいただく。1時間昼食休憩。休憩中にGoogleフォームで質問と感想受付。休憩終了後、質疑応答。質疑応答後、各ワークショップのzoom会場へ移動。各テーマごとにワークショップ実施。1日目ワークショップ内容終了後、全体zoom会場へ移動。2日目の諸連絡をアナウンス。運営学生で適宜連絡を取りながら公立大学協会の方ないし講演者、参加者と連携を取り円滑に運営を行なった。

3.2 大会2日目

3.2.1 閉会式

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

閉会式では、公立大学協会松尾会長、企画委員の伊藤先生から総評いただいた。また今年度代表の菊池より参加者、企画委員の先生方、公立大学協会、主催校である岩手県立大学への謝辞を述べ、閉会の挨拶を行った。全体での写真撮影後、大会終了後の集会禁止喚起や事後アンケート調査へのご協力のお願い、来年度の運営学生募集の呼びかけなどを行った。



3.2.2 2日目総括

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

2日目は、各ワークショップテーマごとの報告会、各テーマのそれぞれ1チームから全体での報告、OBOG企画より先輩方からの講評、閉会式を行った。

集合時間前には、オープンチャットにてzoomURLのリマインドや、出欠確認などを行った。昨年度、2日目になると運営が把握していない欠席などからグループが成り立たなく

なるなどの（人数不足のため）課題が生じたが、今年度は事前にグループ内で2日目の人数を把握していたことなどから混乱は最小限に抑えられたといえる。

3.3 ワークショップ

3.3.1 テーマ① 配慮ケア

【LINKtopos2021 運営 北九州市立大学 国際環境工学部 3年 川相恵吾】

◎概要

テーマ①では、災害が起きて避難する際や避難所における共同生活に対して様々な問題を抱えることに注目した。その一つとして、障がい者のみならず、高齢者や妊婦、子どもといったあらゆる方を私たちは支援する必要があるだろう。今回は実際に当事者の声を聴き、私たちがどのような思いを持ち、どう行動していくことができるかを参加者に考え、ポスター作成をした。

【LINKtopos2021 運営 岩手県立大学 総合政策学部 2年 山崎恵理香】

◎成果

ワークショップでは、事前に運営学生間で全体の流れを確認したため、早期に不具合の修正ができ、当日の時間通りの進行につながった。また、問題が発生した際には、運営学生同士で連携し、対処することができた。グループワーク中は、事前課題に基づく前提知識を活用した議論を参加者に促すことができた。そして、各グループ内をゲストスピーカーや先生方、運営学生が視察することで、参加者が質問しやすい環境づくりを行った。最後に、中間発表や、最終発表の際の時間調整に関しても円滑に進めることができ、成果物の回収を迅速に行うことができた。

【LINKtopos2021 運営 熊本県立大学 総合管理学部 3年 前田竜秀】

◎課題

上記の成果に対し、解決しなければならない課題点も多く見つかった。大会前、大会中、大会後の時系列に沿って以下にまとめる。

まず、大会準備における課題が2点挙げられる。

1つ目はゲストスピーカーを大会1か月前に依頼したことである。これは、検討中であった「復興」「風化」「防災」というテーマから「復興・町おこし」「配慮ケア」「コロナ禍における地域活動」に変化した際に、「配慮ケア」に関するゲストスピーカーを変更する必要があったからである。また、変更にあたり十分な話し合いの時間が持てなかつたことも課題である。テーマ変更に伴ったゲストスピーカーの洗い出しを先行して行っていくことが必要だといえる。

2点目は、ワークショップ専用のオープンチャットの設置検討についてである。zoomのチャット欄では連絡に気が付きにくいという意見が参加者から挙がった。各ワークショップごとにオープンチャットを用意して、連絡方法を統一しておくと間違いや確認漏れの防止にもつながるのでないかと考える。

次に大会中の課題が3点挙げられる。

①運営に関して

進行中の運営の緊張が参加者側に伝わっている点が挙げられた。他のワークショップテーマでは運営がよく運営内で会話し、笑顔で進めていることから、ファシリテーターを務める学生だけでなく、チーム内で雰囲気づくりを行っていくとよいのではないかと考える。また、こちらの意図した通りに連絡が伝わっていない場面があった。時間の区切り等については細やかに伝えていく必要がある。

②システム等の仕様に関して

各グループの発表用資料のテンプレートをこちらで用意しておくと、様式を統一できることに加え、その分の時間の削減と終了後の共有の手間を無くすことができるのではない

かと考える。様式の自由度は下がるため、その点も考慮したうえで検討していきたい。また、zoomのアナウンス方法について、ブレイクアウトルームへは、ホストのブロードキャスト機能を使わなければアナウンスできないことがわかった。しかし、参加者が話し合いに集中していてアナウンスに気が付かない場合も考えられるため、必要に応じて運営学生が各ブレイクアウトルームを巡回し声掛けを行うと、より丁寧である。加えて、zoomの機能についてもアップデート等により仕様が変更になることがあるため、事前によく把握しておくことが求められる。

③グループワークに関して

先生方の質問が長引いてしまい作業に支障が出てしまったグループがあった。ワーク中の質問については、作業に支障が出ない程度に行っていただき、助言であれば簡潔にご教授いただくということで、先生方とも共通の認識を持てるようにしていく。さらに巡回する中で、作業内容が確認できないグループがあった。出来る限り進捗状況がわかるように参加学生に協力を依頼する。また、班員全員が揃った写真を撮影できなかつたため、発表中に発表している班全員がカメラをオンにし、撮影できると良い。特に話し合い中の写真撮影は作業を妨げる可能性があるため、その場の状況に応じ、記録を行っていきたい。

最後に、大会後の反省点について、講演に関する質問・感想フォームの案内をするタイミングを逃してしまったことが挙げられる。休憩前やzoomのルームを移動する前に諸連絡として案内の時間を設ける必要があった。



3.3.1.1 講演会

【LINKtopos2021 運営 岡山県立大学 保険福祉学部 4年 横田朱音】

◎概要

高橋未宇さんよりお話を伺った。高橋さんは、先天性の脳性麻痺より日常生活では手動の車いすを使用している。2011当時小学5年生の高橋さんは、日頃の訓練通り、先生方、ご家族の協力のもと避難された。現在は、防災は福祉と同じく、全ての人に必要なものであり、ニーズは人それぞれであるという考え方のもと、各地で講師を務めておられる。今回は、当時の避難及び避難生活の経験から、抱えた思いや問題点、現状についてお話しをいただいた。

◎成果

事前課題を含め、高橋さんの経験を伺ったことから、参加者は配慮ケアについて具体的なイメージをもつことができた。

◎課題

講演後の質疑応答の回答フォームを事前に用意していなかったことから、以下2点の課題が生じた。1点目、グループワークの時間で、質疑応答に時間を割き、時間に余裕が無くなった班があった。2点目、全体に周知するタイミングを逃してしまった。

3.3.1.2 テーマ別報告会（成果物一覧）

【LINKtopos2021 運営 岩手県立大学 社会福祉学部4年 菊池眞悠子】

◎概要

テーマ別報告会では、発表5分、質疑応答5分で時間を設け、成果物の報告を行った。また、報告を行った6班から、全体で報告する班を投票で決定した。

◎成果

それぞれ、様々な媒体を使用したポスターが作成されており、他のテーマより班の数が多いことから様々な視点の考えが共有できたといえる。

◎課題

発表後の質疑応答時に、質問者の指定をしていたにもかかわらず質問が出ないことがあった。こちらから質問者を当てるか、出ない場合は感想や補足も可とするなどして対応していく必要がある。

（成果物一覧）

「地域カルテ」

01 背景

様々な課題を持った人がいる
→それぞれの地域にどれだけそれぞれの配慮が必要な人がいるかわからない
→避難時、もしくは避難所に運営時、
どんなケアをすればいいのか、
どんな準備が必要かわからない

02 内容

①地域の特性
人口、世帯数、居住人口、高齢化率、高齢者数、面積、建物、外国人の居住状況、災害時要支援者の居住状況
②地域の災害リスク
想定震度、浸水想定、地震の強度、液化化の可能性、過去の災害特徴と想定、住宅密集度等
地域の火災対策実施状況
避難所の登録人数、備蓄状況、防災訓練、帰宅困難者ステーション数、津波避難タワー、福祉施設
要支援者希望者リスト
安否確認希望者の居住場所、人手が足りていない地域
既存の地域別防災カルテとの違い
→ソーシャルキャビタルや人手が足りていない地域を大学が評価する

03 フライバシーの配慮

地域カルテには様々な個人情報が記入されるため、プライバシーへの配慮が重要となる。
そこで、
・地域住民全員用
(地域の基礎情報や特性、要支援者の個人情報を)
・ケアに携わる方や避難所運営する方等の情報が必要な人の氏名、住所等(情報の漏洩が必要な人のケア等)
の細かい個人情報の掲載有無で分けられて成
また、情報などの範囲で公開するのかについてはケアが必要な方や家族の意見を聞き作成する。

04 公立大学の役割

①公立大学の役割
学んだことを実際に起こし、地域に貢献していくこと
↓
②地域カルテを作成する過程で公立大学での可能活用
③地域の人や行政、教授(専門家)に協力してもらうよう声をかける。
④地域の現状把握のための調査(住民を交えたワーキングショップ、ミーティングなど)や作成を主導的に行う
→地域の人と、行政の横渡し的な役割を果たすことになる。

05 効果

①地域住民の防災への関心・意識の向上
②地域のつながりの強化
③配慮事項に対する避難所の体制強化

避難所でのトラブルを減らすために

みどりの窓口
TEAM MEMBER

【目的】
幻聴・幻覚のある統合失調症の方や視覚・聴覚に障害がある方、糖尿病などの慢性疾患を抱える方など心身に困難を抱えた方でも避難生活をしやすくする

【5W1H】

WHEN 災害が起きて避難をした時
WHERE 避難所
WHO 公立大学生が主体
WHAT 公立大学生の窓口を開設
避難してきた人の話を聞く(要望や障害に対して理解してもらいたいこと)
避難者の不安を和らげるよう相談にのる
HOW ドアプレート作成
記入事項
①持っている症状・困っていること・してほしい事
②緊急連絡先(かかりつけ医・ヘルパーさんなど)
③よく使う薬・医療用品

【公立大学生の役割】
ドアプレートシステムを導入したとしても...
➡事情によりドアプレートに書きたくないけど支援は欲しいという方たちも存在する
➡そもそもドアプレートを自力では作るのが困難な方もいる
↓
公立大学生が介入することで円滑に進む
その理由は?
-地域との繋がりが強い学生が多い
-地域に根ざした大学の学生であれば受け入れてもらえやすい
(歴代の先輩方が積み重ねてきた信頼など)

【期待する効果】
避難所でのトラブル回避
↓
避難者同士の助け合い
情報がわかることにより、互いに理解する事ができる
ボランティアが入りやすい
医療従事者がスムーズに処置しやすい
↓
ボランティアや医療従事者が来る前に予め大学生が情報を収集することで、対応・介入がしやすくなる

チームひまわり(配慮・ケア2班)

見えない障害をどのようにケアするか

背景
見た目で判断できない障害は周りの人が気づきにくく、特別な配慮が必要。

目的 周りの人が見えない障害に気づき、支援法を知る

災害時障害者の方が避難所で過ごしやすくなる

提案の全体像

考えられる課題
 -周りの人が障害に気づかない
 -対応方法がわからないと、無意識に
 聴覚障害の方を傷つけてしまう可能性がある
 -情報の伝達不足

私たちができること
・知る活動
 当事者インタビュー

伝える活動
 小中学生 →絵本や紙芝居
 高校生・大学生 →SNS
 手話、筆談、大きい字でゆっくり話す
 口の形を見せる
 相手の視界に入る

公立大生の役割
 -地域に情報を発信すること
 -きっかけづくり
 -子供にも近い存在

期待される効果
災害時に、避難所で障害者が過ごしやすくなる
子供もケアをする側としての役割を持てる

ONIGIRIS

避難所にコミュニケーションの場を作ろう！

1 目的
 -ストレスを解消する。
 -情報弱者や精神障がい者の方のサポートの役割をする。
 -避難所にいる人を理解する。

2 背景
 -他人との生活によりストレスがたまる。
 -情報を得にくい部分がある人がいる。

3 理由
 -避難所の様々な制限によるストレスを解消する場を提供したい。
 -誰もが同じ情報を平等に得られるようにしたい。

4 提案の概要

いつ？ 災害時
どこで？ 避難所の外や空きスペースなど
だれが？ 大学生を中心とした被災者の方々
なにを？ コミュニティーを作る

①挨拶やスキンシップなど軽いコミュニケーションから始める。
 ②共通点を持つ人を集めて座談会を開く。
 ③一緒に体を動かす。
 ④大学で得た知識や特技をもとに、勉強会や○○教室を開く。

5 日常的に公立大生にできること
 -介護や精神科のプロから、自分たちでもできることを教わっておく。
 -普段から地域のイベントに参加し、信頼関係を築く。
 -同大学他学部や他大学の学生と、避難所の課題について情報共有、意見交換を行い、多面的な意見や技術を身につけておく。

避難所でのストレスの軽減
 -情報格差が少なくなる
 -孤立の回避

それぞれのニーズに合わせた避難所を選べる環境を作ろう！

4 グループ クローバー

自由
 -みんなが安心して避難できるようにする
 -必要な支援を必要とする避難所に応える
 -避難所をより楽しむためのものにする

配慮が必要な方
 聴かのあの方
 (高齢者、身体障害者、知的障害者、精神障害者など)
 LGBTQ
 在宅治療をしている方
 乳幼児
 犬猫

一人ひとり生活習慣 必須調理品 価値観 などの違いがある

避難所での生活に対する指標・ストレスを感じる

一人ひとりのニーズに合わせた避難所が必要なのは？

備品や対象者を示した防災マップを作ろう!

災害が起る前に避難所にもり得る場所！みんな！
 災害が起る前に、別に避難所にもり得る場所であります。
 避難所になり得る場所、実際に避難するであろう場所（学校、行政施設、公園など）
 みんな、配慮が必要な人と含む地域住民、専門職の人、専門分野を学ぶ人、大学生など

誰にでもわかりやすいマップにするコピックグラムの活用
 お問い合わせ
 災害について考えるきっかけにする

↓ 大学生できることは？ ↓

①まずは参加しよう！ イベントに参加して地図の方と交流する
 ②一緒に考え方よ！ 自分の学んだ知識を活かす
 ③みんなの意見を聴こう！ 子どもたち、大人、健常者と配慮が必要な人、専門職の人
 ④しっかり学ぼう！ 防災マップの作りを通して災害に対する意識を持つ

ストレス軽減・避難所の混雑を防ぐ・日常的に意識できる・誰にでも理解しやすい・いろんな選択ができる・必要な物資が行き届きやすい

注意点・課題点としては…
 配慮が必要な人とそうでない人を区別し過ぎない
 自分のやがいを知らないくない、認めたくない人も少なからざる
 交通手段が遮断される可能性があり、目的の避難所にたどり着けない
 視覚障害者の方はマップを見えない

外国人に向けた災害時の情報発信
 ~多国籍な避難所をめざして~
 byグローバルネットワークチーク

背景・目的
 災害時は必要な情報を受け取ることができず、被害を受ける方がいる。そこで今日は外国人の方に着目し、避難所生活を送る外国人向けの情報発信や情報共有を目的とする。

提案の全体像

背景
 災害発生前 災害発生後

where 公立大学の存在する各地域 各地域の避難所

what 外国人にも伝わる情報提供 外国人が使いやすい避難所設営

who 公立大学のボランティア団体や国際交流サークルに所属する学生

why 災害情報が伝わりにくい住民との関りがない... 避難所が使いづらい...

how ○住民と外国人の交流会 ○災害に関する情報提供 ○避難所を共同使用する施設の案内板

大学生の役割
 ⇒地域に根差した活動が可能
 ⇒それぞれの地域に密着した情報提供や情報共有の実施

効果
 -外国人の不安が解消される
 -住民と外国人のネットワークが構築できる
 -外国人の方が正しく災害情報を得られる
 +安心して避難所を利用できる
 -平時における外国人の安心感

3.3.2 テーマ② 復興まちおこし

【LINKtopos2021 運営 北九州市立大学地域創生学群 3年 妹尾多恵】

◎ 概要

テーマ②では、東日本大震災の震災当時を振り返ったり学んだりすることで災害時意識すべき注意点や課題を把握し、様々な観点を得て、いざ災害が起こった時に学生はどう地域と関わることができるかを考察し、アイデアをポスターにまとめた。

◎成果

運営学生の動きとして、WS開始前に運営学生間で進行の確認などを行い、問題が発生した際、運営同士で連携し合って対処することができた。
WSの成果として、三陸鉄道株式会社の二橋様の講演を通して、参加学生は震災当時の現状の振り返ったり、新しい知見を広めることができた。またそれを元にして災害時意識すべき注意点や課題をグループワークを通して列挙し、復興まちおこしに関する学生ならではのアプローチを成果物として、すべてのチームが1つのポスターにまとめ発表することができた。

◎課題

テーマの反省として、復興町おこしという大きなテーマを扱う上で、成果物を作成するためのアイデア出しで「具体的に何を発表すればいいですか？」という質問が見られた。この点に関して、復興町おこしから派生する多様なテーマの方向性や、最終的なイメージ像についてより多く運営学生間で検討し、より詳細なテーマ設定を加える、または説明する必要があったと反省する。またWS進行の反省としては、上記と同様に各進行資料の中により詳細な説明を加えるべきであった。そしてグループワークで用いたKJ法などはよりわかりやすく伝える工夫をとるべきであった。



3.3.2.1 講演会

【LINKtopos2021副代表 岩手県立大学総合政策学部2年 及川駿斗】

◎概要

三陸鉄道株式会社の二橋様に講演いただいた。三陸鉄道で運行されている震災復興列車についてや、三陸鉄道を中心として街の復興していく様子や復興支援活動などについてお話をいただいた。三陸鉄道の存在が地域の人々の心の支えであり、復興のシンボルであったということを学んだ。

◎成果

事前課題で予め三陸鉄道株式会社をはじめとした復興町おこしに関する取り組みについて調べていたことにより、二橋様の講演内容がスムーズに頭に入った。そして講演会を通して、参加学生は講演会後のグループワークに繋がる、震災についてそして復興支援についての広い知見を獲得することができた。

◎課題

講演後の質疑応答の回答フォームを共有する機会を逃し、参加学生はZOOM内で講演者である二橋様に直接質問する流れとなつたため、学生から質問しづらく、二橋様のほうから声をかけていただいていた場面が多くあった。

3.3.2.2 テーマ別報告会

【LINKtopos2021 運営 北九州市立大学地域創生学群 3年 妹尾多恵】

◎成果

復興町おこしをテーマとした多様なアイデアがポスターという成果物で集まった。各班ポスターを掲げ、5分間の発表を行った。ポスターに組み込む要素は運営側から指定して挙げていたが、班によっては内容を膨らます要素が異なり、大きいテーマだからこそそのアイデアの広がりが特徴的だった。各班発表後に質疑応答の時間を設けたため、意見交流ができた。

○課題

班の発表後に質疑応答の時間を設けたが、運営学生と教員の方の質問・感想が目立ち、参加学生からの質問・感想が少なかった。環境がオンラインであるため、その場で当然発表者を指名するのは負担が大きいため、事前に発表者がいない場合の対応案を準備しておく必要がある。

(成果物一覧)

被災者をつなぐコミュニティ
～大学生が架け橋となって～

◀背景・目的> 最初の疑問：「復興にゴールはあるのか？」

復興のゴールに必要なのは、まちとヒト両方の視点
○まちの復興：持続可能な、未来の災害に対応できる
○ヒトの復興：精神的な状態、自身の中で整理できている

ヒトという視点から復興を達成することを目指してアプローチをする

◀提案>

・復興住宅に引っ越して、周りとの交流が少なくなった…
・震災の影響で人が地域外へ移って、コミュニティが無くなった…

コミュニケーションの復興を目指す

When: 数か月に1回
Where: オンライン+たまにオフライン(年1程度)
...オンラインできっかけづくり、回数を重ねながら現地でオフラインなど身近なコミュニティにつなげる
Who: 被災者同士のコミュニティを中心
What: 対話をする(震災の話もそれ以外でも)→コミュニティを形成する
How: 大学生が主導して参加者を集め
震災前に関わりのあった人 新しいまちの人
コミュニティの復活と形成

（大学生の役割）

はじめは大学生が主体で声をかけてコミュニティに入ってくれもらう

↓

参加者に自主的に参加してもらう

【参加者の集め方】

- ・市役所に、移住した人などを含めて案内を送ってもらう
- ・広報に載せてもらう
- ・SNSで配信する（facebookとか）
- ・参加した人から周囲に紹介してもらう

（期待される効果）

・仮設住宅から移動した後の交流など
・オンラインなら離れていた人も再びつながりをもちやすい
・交流（話す・聞く）を通して、被災者が震災を中心で整理するサポートをする







Team どこでも井戸

<p>■ テーマ 地域住民のつながりの向上</p> <p>■ テーマの背景 災害への意識の低さや世代間の意識差を問題視 ↓ 地域全体の防災力を高めることが大切 ↓ 地域住民のつながりをつくる役割を目指す！</p> <p>■ 提案 誰でも何処でも井戸端会議！</p> <ul style="list-style-type: none"> When: 定期的に行なう Where: これまで災害が起こっていないような地域 井戸の設置場所は転々と変わる Who: 公立大学生 What: 日常に溶け込む世代間交流（「どこでも井戸」） Why: 世代間を超えた交流の場を作るため How: 様々な場所に井戸を設置 井戸の中には全世代が楽しめるもの+防災に関連したもの を入れる 	<p>■ 公立大学生の役割</p> <p>持ち運び可能な「どこでも井戸」</p> <p>ボンチャの道具 音の道具 毎回テーマを投げかける 運営方法を地域住民に教える</p> <p>■ 期待される効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公立大学生を通じた地域コミュニティの強化 ・地域住民の防災力強化 (災害時に住民同士で安否確認ができるようになる、など)
--	--

防災を自分事にする防災学習

- 課題** 子供たちの防災に対する薄い意識・親近感
→小学生に楽しいと思ってもらえる防災学習で克服！
- みんなから出た防災学習に対する意見自分の経験をもとに)**
- ・防災訓練に対して重いイメージしかない
 - ・言われたことをやるだけではつまらない ⇒ 全国各地の共通点
 - ・災害をイメージできず
 - ・自分が動くものだと楽しい

防災クロスロードの実施

- プラン** 夏と冬の避難訓練前に実施
児童・教職員を、5、6人を1グループとし、そこに大学生1名以上入る。
児童・大学生・教職員全員で立場関係なく取り組む

方災クロスロードとは？

方災クロスロードとは、正解のない防災に関する問題に対して、YesかNoどちらかを選びその理由を自分で考えるゲームです。

-人だけ違う意見でも言いやすいように、多数意見だったら1点、少数意見だったら0点とポイント制にする。また一人だけ違う意見だった場合には2点をあげる。

最終的に、何点になったか数える。

クロスロードの問題の例

自分が生活している避難所では、新型コロナウイルスが流行っています。このままでは自分もコロナウイルスに感染してしまうかもしれません。まだ強い余震が続いている不安ですが、家に戻って生活しますか？

Yes: 家に戻る
No: 避難所で生活する

地震が発生して、今から避難所に避難することになりました。飼っている犬も一緒に連れていきますか？

Yes: 連れていく
No: 連れて行かない

さらに！ オンラインで、全国の学生がファシリテート！

GIGAスクール構想によって1人1台のPC環境が整備され始めている学校現場だからこそ、オンラインを活用することができる！拠点校となる大学の学生以外はオンラインでの参加も可能に！

期待される効果

公立大学生の役割

- ・各地域の大学生がファシリテーターとして参加することで、答えのない問い合わせに対して、立場や地域を超えて、様々な地域の災害について考えることができる。
交流自体も児童の楽しみに。⇒楽しく学ぶ
- ・教員、児童以外の**第三者として大学生が参加する**
→普段の「教員（教える）→児童（教わる）」という関係ではなく、
教員×児童（ともに考える）ことによって、児童の柔軟で創造的な考え方を引き出すことができる⇒防災学習に対する重いイメージの払拭／自分で動く
- ・クロスロードを通して、災害を自分事としてイメージする
⇒既存の取組（避難訓練）の効果をより高めることができる



わたしたちのネットワーク
～同じ過ちは繰り返さない～

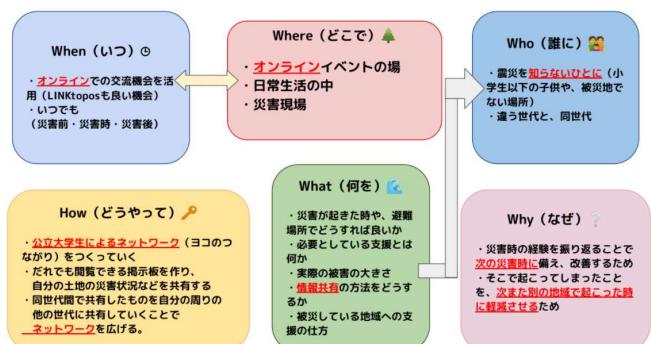
チーム名 大自然（仮）

背景・目的

災害時に起こった不都合が、次に同じように起こらないようにするために
どのようにして伝えていくかが鍵

～それぞれの場所で起きた災害の状況の違い～
○例)日本大震災、西日本豪雨災害での被害
(例)内陸：ライブ線の停止、ガソリンの供給制限 ニュースで報道されていな地域での被害状況
○避難所での課題
(例)西日本豪雨災害：エアコンがない避難所があった為、熱中症が危惧されていた
プライバシーが守られにくいため

防災だけでなく被災後に必要なこと（災害を越えていく）
10年という時間の経過で忘れてきていることが多い
⇒被害状況などの現状を知ることで、自分の事として捉え、災害について考えるという目的



公立大学生の役割

○LINKtoposの繋がり
(ヨコの繋がり) から発信

→被害状況などを全国で共有できる
ツールを作れたらいい！

★オンラインで気軽に集まることができる
大学生だからこそできること

○世代間の架け橋 (タテの繋がり) となり、
情報の共有の手助けをする。

→大学生間のネットワークを
自分の住む地域に拡大

★地域のコミュニティでの役割
震災を知る世代と知らない世代の間の世代
だからこそできること

期待される効果

親戚や友人がいない地域での災害はどうしても他人ごとになってしまふが、
ヨコの繋がりでその地域に知っている人がいることで自分ごとになる

オンラインなどを活用することで
広範囲に広めることができる

タテの繋がりとして、その地域の住んでいる大学生が伝えることで、伝えたいことに信頼や重みを持たせることができる

次の災害が起きた時、被害を少なくするための情報共有ができる

3.3.3 テーマ③ コロナ禍における地域活動

【LINKtopos2021 運営 岩手県立大学総合政策学部3年 田頭知樹】

◎概要

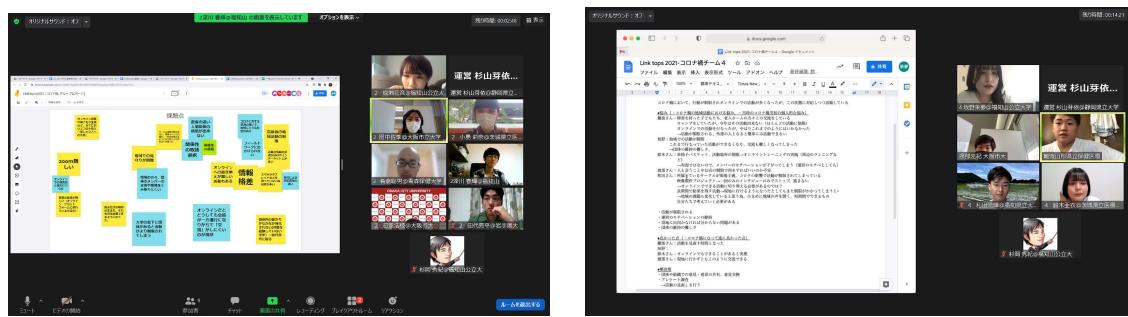
テーマ③では、コロナ禍における学生の地域活動に注目してワークショップを行った。4つのグループに分かれ、それぞれのグループで自分たちが考える課題についてより深めて企画書を作成した。

◎成果

ワークショップでは、他のテーマと違いゲストスピーカーがいないため時間に余裕があり、自由度の高い進行ができた。

◎課題

発表時間や中間発表で、何を行うか参加者が把握できていない状態だったため、詳細を書いたものを用意しておくか、参加者わかりやすいようにまとめてチャットに送る用意をしておく必要があった。また、ブレインストーミングやKJ法の説明のあとに、ブレイクアウトルームに分かれて何をするか把握できていなかったため、一気に説明のみにして作業に移っても良かった可能性がある。



3.3.3.1 各団体の活動共有

【LINKtopos2021 運営 岩手県立大学ソフトウェア情報学部1年 國井大地】

テーマ③では、各団体のコロナ禍における活動等についてを事前課題としてまとめ、それらを共有した。コロナ禍における活動の内容や悩み、工夫、さらには反対にコロナ禍によって得られたものや良かった点を中心として共有することができた。これにより各班が班員の団体の状況を共有することによって、より質の高いワークショップを開くことができた。

3.3.3.2 テーマ別報告会

【LINKtopos2021 運営 新見公立大学 健康科学部2年 徳山光希】

◎成果

テーマの幅が広く、意見交換や課題設定に行き詰まることが予想されたが、どのグループも和気あいあいとした雰囲気の中、スムーズに話し合いが進んでいたように見受けられた。企画書をポスターにしたことによって、各グループの色が出ており、一目で分かりやすいものになった。

◎課題

発表時間や中間発表では何を行うのか、参加者全員が把握できていない状態だった。ブレイクアウトルームに移動後も、全体説明で使用したパワーポイントを閲覧できるようにする、詳細をまとめた文章をチャットに送る等といった準備をしておく必要があると考える。

また、ブレインストーミングやKJ法を行う時間をとっていたが、ブレイクアウトルームに

移動後の流れを把握できていなかったため、細かく時間を区切るのではなく、全ての説明が終わった後、ブレイクアウトルームに移動し作業を開始する方が参加者の混乱は生じにくかったと考える。

(成果物一覧)

モチベーション向上大作戦
超現実的に実現可能な学生組織の仕組みを考えてみた

背景
コロナ禍で地域活動のモチベーションが下がる大学生が多い。モチベーションの下がった学生は活動量が減り、地域活動をやめてしまう。地域で学生がアフターコロナも関わる続けるためには、学生のモチベーション向上が不可欠である。

地域コミュニティ
モチベーションを高める方法
オンラインやオフラインに合わせて地域的に連絡を取り関係を築やすくなる。

学生のモチベーション
・地域などの継続的なコミュニティに入ること
・異なる価値観や知識に触れる

価値観に触れる
オンライン等での企画により他大学との交流。またはそれを実際に移す際の地域の人たちの交流。

効果
コロナに影響されるごとに学生の自己実現と地域活動を行ふ。コロナに特化した活動ではなくアフターコロナの同様に活動を続けられる。

LINKtopos2021
The 02 Group
-コロナ禍における地域活動-
02 Group
The 02 Group
LINKtopos2021
高齢者に向けたオンラインツール導入の取り組みについて
-透ちゃん×チャレンジャーズ-

Background
コロナ禍によりさらにオンラインツールが活用される中、高齢層の地域住民はオンラインツールを日常生活に導入することが出来ていない現状である。その背景には：①単身高齢者が増加し、周囲に頼りにくい環境 ②自分で説明書を読み、自分で理解することが難しい ③情報が溢れる現代で正確な情報を得ることが困難などが挙げられる。この背景によって、仕事に影響したり、家族と連絡が取れずに孤独感を感じたり、必要な地域情報を受け取れなかつたりする等の影響が出るのではないかと考える。

Purpose
大学生として普段からオンラインツールに使い慣れている為、その知識を高齢層の方々に伝えていくことによって日常生活の質を向上させると同時に、世代間のコミュニケーションを促進する。また高齢者の見守り体制を創り上げることで高齢層が孤立するのを防ぐ。

Our Idea

- 01 IDEA** 高齢者視点でオンラインツールをマニュアル化
 - 高齢者自身が自分で読みでも理解できるようにオンラインツールのマニュアルを作成する。
 - 制作時は学生の知識と高齢者の方々の視点を意見を交わすことで作り入れていく。
- 02 IDEA** 無料サービス（スーパー）を設けて相談窓口となる
 - スーパー等の中に相談窓口を設置し、相談窓口を開設する。
 - 買い物のついでにオンラインツールで分からないことはあれば相談に学生が乗れるようなシステムを構築する。
- 03 IDEA** 地域へ出向リ旗座1→紙芝居方式で巡回
 - 昔の紙芝居さんのように地域を巡回し、必要なときは相談に乗る。
 - 地域へ出向リ旗座2→移動式スーパーの運営
 - 移動式スーパーの企業と学生が連携し、買い物ついでに相談を受ける。

Another Idea
地域の高齢層の方々に向けての広報としては、回観板にて情報を流す。高齢層の方々が日常生活で訪れる施設等にチラシを置く、地域の新聞社と連携し情報を掲載してもらおう等で情報発信していく。

Effect

- オンラインツールの使い方にについて聞きたい時に相談できる。
- コロナ禍でも家族との繋がりを絶やさない。
- 学生が地域の見守り隊となる。比較的安心して生活できるのではないか。
- 座学にこらわれることなく地域で実践的な学びを得られる。
- 色々な価値観に触れる、ダイバーシティ精神を育む。
- 自分自身が教えることによって情報リテラシーを学び直しが出来る。

3.4 ポスターセッション

【LINKtopos2021 運営 静岡県立大学 国際関係学部 4年 杉山芽依】

◎概要

参加者が取り組んでいる活動や研究について5分程度の紹介をしてもらい、参加者同士で内容理解や意見交換を行った。今回は事前にパワーポイントなどの資料（データ）を準備・提出のうえ、当日はoViceの機能を活用しタイムテーブルに沿って各団体が画面共有による活動紹介と質疑応答、交流を行う時間とした。

以下のフォーマットに従い、活動紹介をしてもらった。

1.大学名・団体名

2.活動内容

3.活動メンバー数（規模）

4.活動目的

5.活動内容、その準備過程、今後やってみたいこと

6.発信したいこと

7.今後の課題・この大会で相談したいこと

また、今回は参加団体が8団体と少なかったため、1団体ずつ発表し他の参加者が傍聴するという形をとった。

◎成果

今大会ではポスターセッションをLINKtopos「0日目」とし自由参加としたため、発表団

体・傍聴者ともに例年より少なくなった。そのため、ターム制ではなく順番に1団体ずつ発表していく形式に変更したことで「気になる団体を時間内に回りきれない」「自分が発表を担当しているため他の団体の発表を聞きにいけない」といった部分を解消できた。

同じく全面オンライン開催となった前大会ではZoomによりポスターセッションを行ったが、今大会ではoViceというツールを採用した。会場の背景や参加者向けのアナウンスを公大協の方に設定していただき、近づくことで声が聞こえ、スピーカー機能があるというツールの特性も相まってオンラインさながらの臨場感を演出することができた。

◎課題

事前に10～15人程度の規模での動作確認しか行わなかったため、回線が重く動画がうまく再生されなかったり、会場の中で近くにいる別のグループ同士の会話が干渉してしまったりなどのトラブルが起こった。

また、発表後の交流があまり盛り上がりらず、テーブルに人は集まっているものの質問や意見交換が行われないということがしばしばあったため、参加者同士の交流を促進するために同じテーブルのほかの参加者に話を振るなど、運営側のファシリテーションの工夫が必要だと考えられる。

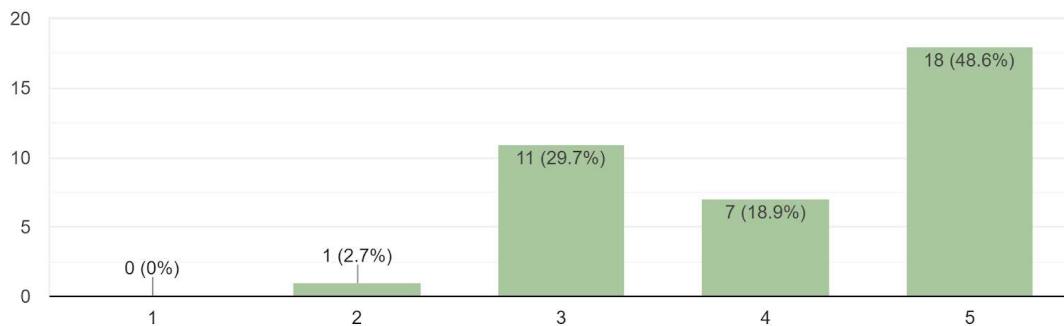


3.4.1 ポスターセッション（満足度）事後アンケート結果/参加者の声

【LINKtopos2021 運営 静岡県立大学 国際関係学部 4年 杉山芽依】
◎ポスターセッションの満足度について(事後アンケートより)

ポスターセッションの満足度について

37 件の回答



◎ポスターセッション参加者の声

- ・他大学の方の取り組みを知り、さらに自分たちの活動を頑張りたいと思うことができました。SNSについて意見をいただいたので、参考に改善していきたいです。
- ・自分たちのしていることを伝えたり、色々なところの人のしていることを知れてよかったです
- ・他大学生の様々な意見や考え、企画などを見ることができてとても良かった。
- ・質疑応答の時間も十分あり、他のグループの学生や教員からの質問や感想をもらえたことで、新たな学びにつながった。
- ・oViceを初めて使用しましたが、リアルで行うときの臨場感に近い再現ができるツールで、とても使いやすく、面白かったです。欲を言えば運営さんのアイコンと一般参加のアイコンが一目でわかるように区別されていればもっとよかったです。
- ・すごくよかったですと思ったわけではないが、いろんな意見を聞けてよかったです
- ・1番始めの3グループだったからか、質疑応答で質問が1つもなく残念でした。質問がなかったため自分たちでその場を回しましたが、自分たちで話しそぎたため質問しにくい雰囲気を作ってしまったのかもしれない後悔しています。
- ・全体発表にしていただいた点はよかったです。ただ、発表スライドを事後でもいいので回収して共有したり、発表目安時間をもう少し早く教えてほしかったです。ポスターセッション後の交流会も運営で雰囲気を全く作らず、結局実質なくなってしまった点は大変残念でした。あとポスターセッションはZoomでもできるのではないかと思いました。(oviceも面白かったです、画面の部分共有などができなかったり、仮想背景が設定できなかつた(ぼかしはできたが))
- という感想が見られた。

3.5 OB.OG企画

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

◎概要

今テーマ「あれから、これから」に沿ってLINKtoposのあれからを振り返る時間にする目的から、第1回以降の学生代表を務めたOB.OG（一部副代表等代理）にインタビューを行つた。ふりかえりとこれから先も大会を続けていくためのきっかけ・今大会の志気を上げるために、開会式やSNS等での動画の公開を行っていく。

◎成果

LINKtopos第1回大会から昨年度の8回大会までのOB.OGにインタビューを行うことで、今大会の運営学生自身が「LINKtopos」への想いを深く感じることができた。特にLINKtoposで出会った仲間たちと現在もつながりがあるというお話をから、この場限りだけでなく、今後も継続してつながっていける仲間との出会いの場にしていきたいと感じた。

また、動画として残することで、聞いたお話を想いを今後多くの学生へ届けることができる事が大きな成果だといえる。参加学生から来年以降も続けてほしいという声もあつたため、今後検討していきたい。

今回は、参加学生へのメッセージを大会開会式にて公開し、インタビュー動画は公立大学協会のホームページにて公開を予定している。

◎課題

今回、初の動画編集という作業があり運営学生の大きな負担になったことが課題であった。もともとの動画が1時間近いことやテロップの挿入、カットなど負担が大きかった。これに関しては、初めての挑戦であったため計画時点では想定できていなかったことや大会当日に向けた準備と並行して進める必要があったことが要因だったといえる。

このことから、複数人で対応すること、余裕をもって計画を進めることが必要であるといえる。

3.5.1 OB.OG講評

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

◎概要

大会当日に参加が可能であったOB.OGの方々から講評をいただいた。今回は、2018年の静岡大会、2020年岡山大会の学生代表を務めたOBから今大会の講評をいただいた。お二人には、大会中自由に入り出でていただき、学生の活動を見学いただいた。

◎成果

OB.OGの皆さんに2021年度大会がどのように運営されているのか、「LINKtopos」がどうつながっているのかを伝えることができた。また、実際に講評をいただくことで、参加学生が達成感を得ることにつながったといえる。

◎課題

今大会が平日の開催であったこともあり、日程の調整が難しかったことが課題であったといえる。大会の日程調整は、開催校や企画委員の先生方、運営学生などの都合が考慮されるため、やむを得ないといえる。

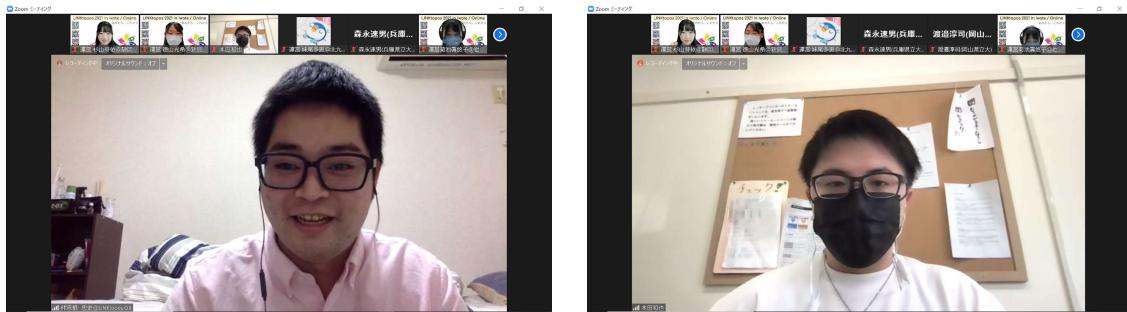
また、当日ご参加いただいたOB先輩方丁寧な対応ができなかったことが課題であった。大会中自由に入り出でし、学生の活動を見学されていたが、その際に運営学生や参加学生と交流する時間を設けるとより充実した時間になったのではないかと考える。

3.5.2 OBOG企画 事後アンケート(参加者の声)

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

- ・先輩方の思いが伝わりました。
- ・教授でもなく学生でもない、社会人視点のLINKtoposの意義を教えて下さり、身が引き締まるような気持ちになった。また、関係性が続いているんだ！と思い、そういう繋がりがあつた。
- ・リンクトポスがどれだけ愛されているか伝わった
- ・OBOGの方々の想いを知り、LINKtoposに参加することの意味を改めて考えさせられた。
- ・運営の方たちがどれほど時間と労力をかけて準備してきたか、垣間見ることができました。
- 運営の皆様、お疲れさまでした。とても楽しい時間を過ごさせていただきました。
- ・先輩から後輩への繋がりを実感できる、すてきな企画だったと思います。来年以降もぜひ続けてください。
 - ・これまでの先輩達がどういった気持ちでこれまでリンクトポスに参加していたのか、今から参加する人にはどういったことを学んで欲しいのかが伝わったので、モチベーションの上がるとても良い企画だなと思いました。
 - ・静岡大会から4年連続で参加していたので、今までの代表の方の話を聞くことができとても懐かしい気持ちになりました。また、今まで先輩方が築いて下さった繋がりを、これからも広げていかないといけないと改めて思いました。
 - ・初めにOBOGが話して下さる事により、どのぐらいの熱量で行っているプログラムなのかも知る事ができた。初めて参加したので、少し圧倒されたが、そこでエンジンが掛かった。
 - ・実際に経験してきた先輩方だからこそ私たちに伝えたいと思ってらっしゃる言葉がしました。
 - ・自分は初めての参加であったものの、それは多くの大学の先輩方や教職員の方々が築き上げてきたものであると同時にこれからはその一員となっていくのだということをかんじた。
 - ・OB、OGの方のお話を聞き、Linktoposがどれだけためになり、貴重な機会か分かりました。
 - ・みなさん参加してよかったですと日々に仰っていて、充実していたのだろうなと感じた
 - ・今までどのような想いでやってきたのか知れてよかったです

という感想が見られた。



3.6 オープンチャットの活用について

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池真悠子】

◎概要

昨年度から引き続き、参加者への連絡はLINEのオープンチャット機能を活用した。2019年高知大会まではFacebookなどを活用し、参加者に（Facebook）アカウントの作成や投稿などをお願いしていた。一方で、参加するためだけにアカウントを作成することへの負担感や、使ったことがないため、使用方法がわからない等の声もあり、昨年度からオープンチャットの活用が始まった。

◎成果

LINEのオープンチャットは、普段から使用しているLINEを使うことで、参加者への情報開示がスムーズに行われた。さらに、オープンチャットに参加したメンバー内で友達登録（個別アカウントに電話やメッセージを送ることができるようになる機能）を行うことができないため、参加者の個人情報を守ることができた。

◎課題

一方で、参加者からの出欠席の連絡が飛び交い、他の参加学生に必要のない情報まで連絡されてしまったことが反省点である。また、これに伴い参加者が気軽に欠席できるという点も課題として挙げられる。

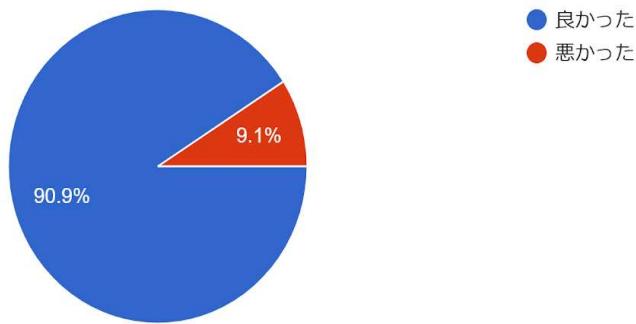
これらの課題に対し、以下の5つの点を今後の改善点として挙げる。

- ①出欠席の連絡はトーク（参加者全員への連絡を行う機能）ではなく、ノート（参加者がコメントで回答し、その情報が欲しい人のみが見れる機能）を使う
- ②ノート自体の認知度を高めるため、トークにノートを周知できる機能を使う
- ③運営と一目で伝えるために、アバター（トップ画面）の画像を統一させる
- ④参加者の電話番号を集め、当日居ない・連絡が取れない参加学生への連絡をとれるようにする
- ⑤オープンチャットやメールでの回答他、参加者との意思疎通が取れない場合は大学や申し込んだ教職員を通して連絡を行う

3.6.1 オープンチャット（満足度）事後アンケート結果/参加者の声 【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

オープンチャットについて

44 件の回答



◎参加者の声

- ・手軽かつプライバシーが守られており非常に良かったです。
- ・詳しいお知らせをいただけたので事前準備がしやすかったです。リアルタイムでも連絡をくださったのでわかりやすかったです。
- 機器の不具合や出欠の報告がしやすい環境だった。
- ・他の人の欠席連絡は違うところでして欲しいと思った。
- ・いろいろな情報がひっきりなしに流れてきて、個人的には分かりにくかったです。欠席の連絡やzoomの不具合などは個別のところで対応した方が良いのではないかと感じました。

3.7 SNSの活用について

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

◎概要

SNS(=Facebook、Instagram、Twitter)を使用し、3.11企画を主とする投稿を行った。3.11企画とは、運営学生11名が自身の東日本大震災当時のことを動画にまとめ、2021年3月11日に合わせて投稿を行ったものである。

◎成果

3.11企画で公開した動画は、大会終了（2021/9/23）時点で、再生数2,221回だった。今大会テーマ「あれから、これから」に沿った企画であり、運営学生自身があれから（東日本大震災）を振り返るきっかけになったといえる。また、被災地と呼ばれる地域とそこから離れた地域での視点が語られている点も、視聴者にとって新たな価値観を得られると考えられる。

◎課題

3.11企画については、企画自体の立案が遅く、投稿を行う3月11日まで動画の編集や投稿内容の添削などを行っていた。また、InstagramとFacebookの連携について準備が間に合わなかったことから、準備不足が課題として挙げられる。

また、SNS担当学生を決めていたが、どのような内容の投稿をするのかなど具体的に話し合うことがなく、開催一か月前からの本格的なSNS始動となってしまった。SNSについては、活発な運用ができなかつたことが課題である。

これらの課題に対し、以下の3点を改善として挙げる。

- ①余裕を持った立案を行う
- ②SNS活用について事前のアカウント作成や、運用について議論を行う
- ③今年度から継続して使えるアカウントを使い、出来る限り多くの人に発信できるようにする

3.8 プログラム全体を通して

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

今年度のプログラムは、昨年度の経験を活かしオンラインの開催でもスムーズな運営ができた。特に、参加者自身がzoomやオンラインツールに慣れ、それぞれのやり方で、成果物であるポスターの作成を行っていたことがスムーズな運営につながったといえる。一方で、2日間という限られた時間の中でポスターの作成を行うことで、例年同様時間に余裕がない状態であった。

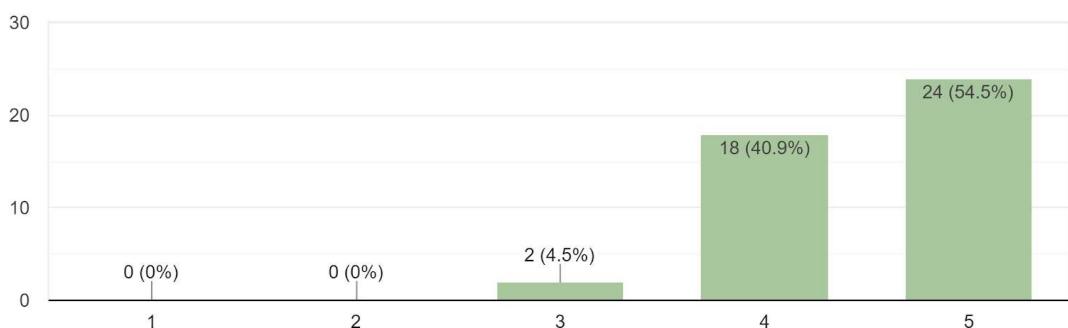
また、今年度は特に参加者それぞれが自分自身の「あれから、これから」を振り返るため精神的に配慮する必要があった。大会中の声掛けや、しおりでの緊急対応についての掲載など細かな対応を行った。今大会は、オンラインでの大会運営の可能性、さらなる発展を考察していくことができる、意味のある2日間となった。

3.8.1 プログラム全体の事後アンケート結果/参加者の声

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子】

LINKtopos2021 in Iwate / online 全体の満足度について

44 件の回答



◎参加者の声

- ・オンラインだったため気軽に参加でき、全国の学生と交流ができたから
- ・初参加だったのですが全国の学生の方と関わることができ、防災について興味を持つことが出来たからです。
- ・初めての経験でしたがたくさんのこと学ばさせていただきました。運営の方々が熱量を持って開催してくださったことも伝わってきました。
- ・全体的にとても刺激になった。私もこれから地域に持ち帰って学びを深めたいと思ったから
- ・今まで災害に凄く苦手意識があり、今回の参加も凄く悩んだ。しかし、こういう視点で考えれば私でも辛くならずに支援出来るかもしれないというように大きく視野が広がった。また、色々な学部の様々な場所に住む学生と交流し、新たな考え方を知ることが出来、本当に参加してよかったですと感じた。
- ・オンラインではありましたがあが、例年と変わらずワークショップで他大学の学生と様々な議論をすることができ、とても充実した時間を過ごすことが出来ました。講演でも新たに

知ることができたことが多く、とても興味深く聞かせて頂きました。時間的にもなかなか難しいと思いますが、ワークショップの班のメンバーと議論以外の話をする時間がなかつたので、もう少し雑談などができる時間があれば良かったと思いました。

- ・ワークショップも活発でしたし、ポスターの成果物も素晴らしいかったです。
質問が出るようになつたり、発表時間がオーバーしないように、その場での対応も素晴らしいかったです。4の理由として、しおりがもう少し早めにほしいです。
 - ・いろんな人と交流できたが、もっと仲良くなりたかった。
 - ・時間にゆとりが欲しかった
- という感想が見られた。

4.次年度以降の学生大会開催に向けて課題、 課題への提言

【LINKtopos2021 代表 岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池真悠子】

1.オンラインツールを参加者が自由に練習できる環境の提供

今回、ポスターセッションで「oVice」を活用した。初めての試みであったことから、運営学生は事前にoViceを使った打ち合わせを行った。運営学生内では、ある程度使用感に慣れ操作ができるようになった。また、前日から参加学生向けに自由に入り出しができ、練習していただくためにoViceのURLを公開していた。いくつかの団体が練習している様子が見受けられたが、の1日半の時間では十分に練習する、慣れる時間にはならなかったように見える。この成果、課題については【3.4ポスターセッション】にて詳細に記載している。zoomやGoogleドキュメントなどが昨年度に比べて活用しやすかったのは、参加学生がその使い方を理解し、慣れていたからだといえる。

これらのことから、新しいオンラインツールを導入する場合は、参加者が自由に練習できる環境を早期から提供する必要がある。

2.オープンチャットの活用方法

昨年度から、オープンチャットを活用し参加者への連絡を行っている。この連絡は、参加者からの出欠連絡や参加者同士の連絡等が行われていた。参加者の使用率が高いLINEを使うことで、情報を見逃しにくく、新しくアカウント登録などが必要である一方で、必要な連絡が飛び交ったことが課題に残った。詳細については【3.6オープンチャットの活用について】で記載している。

これらのことからオープンチャットを複数用意し、ワークショップのテーマごとに使用したり、参加者同士の交流に使用したりと用途ごとの連絡方法を取る必要がある。また、その際参加者が自由に選択できる連絡方法など、今後の連絡方法の在り方を検討していくほしい。

5.全国公立大学学生大会の今後の展望について

【LINKtopos2021代表 岩手県立大学 社会福祉学部4年 菊池眞悠子】

「震災から10年」を越えて

今年は、LINKtoposが始まるきっかけとなった東日本大震災から10年、大きな節目の年であった。たしかに10年という節目ではあるものの、何かの終わりではないと考える。東日本大震災を契機に立ち上がった学生のサークル活動が、それぞれの形で発展しているようにLINKtoposもそれぞれの世代の形でつながっていくために以下の3点を今後の展望として挙げる。

1. 「LINKtopos」の在り方・意義の再定義

今回、各世代の代表の先輩方と話す機会から、様々な想い・葛藤などを伺った。特に、LINKtoposを開催する意義について話し合われたということから、LINKtoposの運営に携わった3年間、「LINKtopos」の在り方、意義について運営内で話し合ったことがなかったことに気が付いた。運営に関わった時点で、何となく「LINKtopos」の意義を感じ、それをつないでいきたいという想いを持った学生が集まっていることが多い。もちろん、自分自身の成長につなげることを目的とする学生もいる。それらの学生が「何となく」ではなく、話し合う場を設け、明確な意義を再定義することが、より良い運営につながると考える。これらのことから、運営学生は自分たちが思う「LINKtopos」の在り方、意義を検討してから企画を進めていってもらいたい。

2. 「災害」だけにとらわれないテーマの設定

現在、日本では様々な地域で地震や津波だけでなく、豪雨や噴火他さまざまな災害が起きている。もちろん、LINKtoposが災害を契機に立ち上がってはいるものの「災害」だけにとらわれる必要はないといえる。今年は東日本大震災から10年ということから防災や風化、復興等をテーマに置き、ワークショップを組み立てた。一方で、災害に興味がない、もしくは精神的負担が大きいほか「災害」というテーマを話し合うことで、参加対象が限られてしまう可能性がある。

これらのことから「東日本大震災」や「災害」にとらわれず、それぞれが考える、公立大学性が今話し合うべきテーマを設定してほしい。

3. オンラインとオフラインの良さを詰め合わせた開催方法の検討

今年度は、完全オンライン開催であったが、開催数ヶ月前までハイブリッドでの開催（オフライン、オンラインを合わせた）を企画していた。オンラインは、参加者が気軽に参加でき、移動時間などを含めず、日程を計画することができる。さらに、オンラインツールを使用することで、半永久的にデータ（成果物など）を残すことができ、後世への引継ぎ、活動の紹介がしやすいといえる。しかし、オンラインではオフラインで学生同士が顔を突き合わせて話し合っている時のあの熱気は、越えられない。参加学生同士が、熱をもってまだ話したりないと、もう少しだけやりたいと言い始めるあの瞬間は、この時間が学生にとって有意義になっているように感じられる。また、参加者同士の自主的な交流はオフラインでの開催のほうが活発であった。

これらのように、オンライン、オフラインともにそれぞれの良さを生かして、開催方法を検討していくことでより良い大会運営につながると考える。

6.謝辞

令和3年度全国公立大学学生大会LINKtoposの開催に際して、ご指導・ご支援をいただきました企画委員の先生方、公大協事務局職員の皆様、そして会場の提供、運営に協力していただきました岩手県立大学の教職員の皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

今年度で9回目となりました本大会は新型コロナウィルスの影響により、オンラインでの開催となりました。開催数ヶ月前まで対面での開催を目指し、準備をする中で、参加学生の実りある学びのために多くの皆様にご助言と励ましをいただきました。感染拡大のため、対面での開催は断念しましたが、オンラインでの開催でも盛況のまま終えることができたのは、参加してくださった学生・教職員・学長の皆様の協力と理解があってこそだと思います。

改めて協力していただいた多くの皆様へ、心より御礼申し上げます。

令和3年度 公立大学学生ネットワーク
代表 岩手県立大学4年 菊池 真悠子

7.公立大学学生ネットワーク運営学生名簿

代表

岩手県立大学 社会福祉学部 4年 菊池眞悠子

副代表

名古屋市立大学 人文社会学部 4年 田邊詩織

岩手県立大学 総合政策学部 2年 及川駿斗

運営学生

岩手県立大学 総合政策学部 3年 田頭知樹

岩手県立大学 総合政策学部 2年 山崎恵理香

岩手県立大学 ソフトウェア情報学部 1年 國井大地

静岡県立大学 国際関係学部 4年 杉山芽依

岡山県立大学 保健福祉学部 4年 横田朱音

新見公立大学 健康科学部 2年 徳山光希

熊本県立大学 総合管理学部 3年 前田竜秀

北九州市立大学 国際環境工学部 3年 川相 恵吾

北九州市立大学 地域創生学群 3年 妹尾多恵

